

「内発的動機づけの状態」

小川 陽平

○内発的動機づけとは

内発的動機づけとは好奇心や関心によってもたらされる動機づけであり、賞罰に依存しない行動である。



授業で生かしていくためには、子どもの好奇心や関心をくすぐる工夫が必要なのでは？

<好奇心の発見>

カナダのマギル大学で行われた「感覚遮断」実験

被験者に、ベッドの上で何もしないで一日中ゴロゴロしていてくれればよいと依頼する。ただし、目にはプラスチック製の覆いをかけ、耳にはフォームラヴァー製のU型の耳覆いがつけられ、手の指は綿製の手袋でつつむ。こうして感覚的な刺激が最小になるように工夫された。結果、人間は退屈を嫌い、この単調な環境は「情報への飢え」が生じ、好奇心をみたすべく常に情報を求めることがわかった。つまり、人間の中には、好奇心が必ずあるのだ。

<二種類の好奇心>

情報を求める傾向は二つのタイプに分けられる。例えば、ミツバチが蜜を集める際の行動で説明すると、巣の近所を特定のあてもなく、飛び回る「拡散的好奇心」と仲間の偵察バチによって教えられた特定の花の香りを目指してそこに直行する「特殊的好奇心」である。

具体例として、退屈なのでたまたま手にした推理小説を読んでいた（拡散的好奇心）ら、そのさきを知りたくてたまらなくなり、終わるまで読まないではいられなかった（特殊的好奇心）。

<好奇心をひきおこす授業について>

子どもに疑問をつくりだすような教育的操作を行うことで好奇心をくすぐることができる。 疑問をひきおこすことで、もっとよく知ろうとして学習に取り組むことができる。そのために、いかにして子どものうちに疑問をひきおこすか方法を考えていきたい。

○参考文献：「知的好奇心」著：波多野誼余夫 稲垣佳世子